26H-pm08

外来化学療法における中止理由とその患者背景

○高木　昭佳[1,2], 吉田　睦浩[1,2], 山之内　恒昭[1], 三村　泰彦[1], 菓子井　達彦[2,3], 加藤　敦[1], 足立　伊佐雄[1]([1]富山大学病院薬, [2]富山大学病院化学療法セ, [3]富山大学病院がん治療部)

【目的】近年、化学療法を安全かつ効果的に行っていく上で薬剤師の必要性が高まってきている。化学療法を治療計画（投与量やスケジュール）に沿って行うことは、抗癌剤治療の成績の向上において最も重要なポイントである。しかし、外来における化学療法では有害事象や患者背景など様々な要因により投与中止となることがある。今回、富山大学附属病院外来化学療法センターにおいて投与中止となった症例について、中止理由と患者背景について解析を行ったので報告する。

【方法】調査期間は平成 18 年 10 月～平成 19 年 9 月までの 12 ヶ月間とした。調査対象は外来化学療法センターを予約した患者で中止となった症例とした。調査項目は患者背景（性別・年齢・癌腫・診療科・レジメン）、中止理由（臨床所見、臨床検査値異常、その他）とした。

【結果】調査対象となった全症例数は 1265 件で、そのうち中止となった症例は 182 件（14.4%）であった。中止理由（複数）としては臨床所見が 101 件(55.5%)で、体調不良 40 件、発熱 26 件、腫瘍増大に伴う治療中止 12 件であった。臨床検査値異常を中止理由としたものは 76 件(41.8%)で、白血球減少が 62 件と最も多く、次いで血小板減少 15 件、肝機能障害 7 件であった。レジメン別では weeklyPTX/CBDCA が 41 件（22.5%）、mFOLFOX6 27 件(14.8%)、CPT11/MMC 13 件(7.1%)と頻度が高い結果となった。また、中止症例において 16 件(8.8%)が入院加療を行っていた。

【考察】今回の解析結果から中止件数の多いレジメンやその理由について把握することができた。今後はこれらを有害事象の重篤度判定や、治療毎の中止基準や減量基準など明確にすることで、安全でかつ効果的な化学療法の実施に貢献できればと考える